（様式1）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

三田市立富士中学校長　　鯉ノ内　克枝

学校教育目標			夢や希望をもち、目標に向かってたくましく生きる生徒の育成
推進主体			研究推進（学力向上）委員会…校長・教頭・研究推進・教務（教育課程）・兵庫型学習・地域コーディネーター
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○多くの領域で、全国平均より高い平均正答率である。 ○「我が国の言語文化に関する事項」の領域では、全国平均を約5ポイント上回り良好な結果といえる。特に、「行書についての知識を問う問題」においては、正答率が96．6%にのぼる。 ◆情報の扱い方に関する事項、思考力・判断力・表現力等を問う問題における、話すこと・聞くこと・書くことにおいては、全国平均をやや下回る正答率で、課題が見られる。
		算数 数学	○全ての領域で、全国平均を上回っており、良好な結果といえる。 ○「数と式」の領域では、正答率が64．4%（全国57．4%）で全国平均を7ポイント上回っている。 ◆「図形」領域の記述式問題では、無回答率が他の問題よりも高く、基礎的な知識・技能を用いて自分の考えを説明することに課題がみられる。
		ICT機器を効果的に活用した取組状況	○「個別最適化な学び」のためのツールとして、ミライシードの「ドリルパーク」の利用を、朝学習において開始した。 ○生徒の意見交流の手段として、ミライシードの「オクリンク」、「ムーブノート」の活用を進めている。 ◆教員用の電子教科書の活用が進んでいる一方、生徒用の電子教科書の活用が全国平均と比べて進んでいない状況である。 ◆ICTの活用方法について、学校としてのスタンダードが作成できていない状況である。 ◆不登校生徒への学力補充の手段としてのICT活用が、全国と比べて進んでいない状況である。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○定期テスト、単元テストに向けて、家庭学習に意欲的に取り組む生徒が多い。 ◆テスト結果については、学力の二極化が危惧される状況である。
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○授業を真面目に取り組み、宿題や提出物もおおむね良好である。 ◆日頃の家庭学習に課題が見られる生徒も少数ではあるが見受けられる。
学力向上に係る学習等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○「1日2時間以上勉強する（学習塾、家庭教師、インターネット活用の時間も含む）」生徒の割合は54．5%で、全国（35．2%）より高い状況である。土・日など、学校が休みの日の学習時間も同様である。 ◆「1日当たり30分以上読書をする」生徒の割合は32．9%（全国27．3%）である。「全くしない」生徒の割合が、昨年度の56．2%から38．6%へと減少しており、改善が見られるものの、継続して読書習慣の形成が課題である。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○「授業が分かりやすい」と肯定的に答えている生徒の割合は、80%を超えている。 ◆「読書をよくしている」という質問に対して否定的に答えている割合が、生徒・保護者・教職員ともに50%を上回っている。
校内研修の状況・研	校内研究の状況		○「特別支援教育の視点を活かした、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」を研究テーマとして、学習指導の工夫、授業改善に取り組んでいる。 ◆昨年度、互見授業は実施できたが、校内全体での意見交流、研修は実施できなかった。
	校内研修の状況		○長期休暇中に、ICTの活用など、指導力向上に関する校内研修を全職員を対象に行っている。
家庭・地域連携	家庭・地域等の状況		○放課後に、「ひょうごがんばりタイム」(地域人材による指導)を実施している。地域の寺子屋を利用する生徒もいる。
	小・中における教科連携等の状況		◆学校園所連携交流会等において情報の交換は行っているが、合同での研修会の開催などの連携までには至っていない。 ○小学校の教科書を職員室に設置し、小学校での既習事項を反映した授業づくりを進めている。

4月			2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回っている。 ○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」の問いにおける肯定評価が昨年度を上回っている。 ○学校評価アンケートにおいて、「授業が分かりやすい」という問いにおける肯定評価の割合が80%を上回っている。	・「特別支援教育の視点を活かした、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」を研究テーマとして、視覚支援などさまざまな支援を取り入れた誰もがわかる授業づくり、個々の資質・能力を高める個別最適化された指導、「何をどう学ぶか」を重視し、「見方・考え方」を働かせて、「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりに取り組む。 ・互見授業期間を設定し、教師間で意見交流を行う。 ・長期休業中などに、授業改善に関する研修を行う。 ・授業のなかで「めあて」を確認する場と、それに対する「振り返り」を行う場を設定することを富士中のスタンダードとする。 ・単元を見通した授業計画を作成するとともに、効果的な場面で意見交流を行う場を設定する。	○互見授業期間を設定し、①視覚支援などさまざまな支援の活用、②ICTを活用するなどの、個別最適化された指導、③「何をどう学ぶか」を重視し、「見方・考え方」を働かせて、「思考・判断・表現」の力をつけるための工夫、等を中心に参観を行い、授業改善を図った。 ○全校生徒を対象とした「授業評価アンケート」を年に2回実施し、そこで得られた回答をもとに、「振り返りの充実」、「板書の工夫」、「生徒用端末の活用」などの授業改善に全教職員で取り組んだ。 ○長期休業中に、ICTの活用方法などの授業改善につながる校内研修を実施した。 ◆各教科において、年間指導計画の見直しを十分に行うことができなかったため、単元ごとに改善を行いながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。	A
ICTを活用した授業の推進	○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。 ○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。	・ミライシードの活用方法について、校内で研修を実施する。 ・ICTを活用した授業実践について、校内で共有を行い、教員全体の指導力向上を図る。 ・教員用の電子教科書がある教科については、ほぼ毎時間電子教科書を活用する。 英語科・数学科における効果的な場面において、生徒用電子教科書を活用する。	○生徒が自らの考えをまとめ、整理するための手段としてミライシードを活用するなど、効果的な場面でのICT活用が進んだ。 ○ICT機器の使用方法に関する校内研修を行うことで、教員用電子教科書を積極的に活用できるようになった。 ○英語科において、生徒用電子教科書の活用を進めることで、生徒が自分のペースで学習を進めることができるようになった。	A
家庭学習の充実	○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含みます）」の問いにおいて、1時間以上の回答が全国平均を上回る。	・各教科で計画的に家庭学習の課題を与えるとともに、「家庭学習の手引き」を作成して家庭への啓発を行い、基礎学力の向上と家庭学習の習慣化のさらなる定着・充実を図る。 ・iPadの持ち帰りを推進し、ドリルパークでの課題配布など、生徒の習熟度に応じた課題を設定する。	○1学期に「家庭学習の手引き」を配布し、各教科における家庭での学習の要点を明確にすることで、効果的・継続的に家庭学習に取り組む生徒が増えた。 ◆タブレットの持ち帰りを進めることができたが、各教科で課題配信を行うことが少なかったため、生徒の習熟度に応じた課題の配信方法について、校内で研修の機会を持つ必要がある。	B
学力補充	○全国学力・学習状況調査の「知識に関する問題」において、全国平均を上回る。 ○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。	・「朝学習」においてドリルパークを活用し、生徒が自ら問題を選択できるようにし、個別最適化した学びを目指す。 ・テスト前や長期休業中に、学習相談を実施する。 ・放課後や長期休業中に、「ひょうごがんばりタイム(地域人材による指導)」を実施する。また、地域実施の「寺子屋」を案内し、指導者との連携を継続する。	○朝学習において、ミライシードのドリルパークを活用することで、個に応じた学習が充実し、基礎的な学力の定着につながった。 ○テスト前や長期休業中に学習相談を実施し、主体的に学習に取り組む意欲や、苦手とする学習内容の理解につなげることができた。 ○「ひょうごがんばりタイム」を実施し、数学の基礎基本や継続的な学習習慣を身に着けさせることができた。	A
読書活動の充実	○学校評価アンケートにおいて、「生徒は読書をよくしている」という問いにおける肯定評価の割合が半数を上回る。 ○全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」において、「読書は好きですか」の問いにおける肯定評価が全国平均を上回る。	・4月に朝読書を行い、読書習慣を定着させる。 ・図書ボランティアを募集し、昼休みの開館時間、本の貸し出し等の充実を目指す。 ・生徒会図書委員会活動を活用するなどして、読書活動の周知啓発を行う。 ・図書館教育と連携し、学級文庫の設置を行う。	○生徒会図書委員会によるお勧めの本紹介など、生徒主体の読書活動の啓発を行った。 ◆図書ボランティアの活用や学級文庫の設置については、今年度実施することができなかったので、次年度以降の実施に向けて、検討を進めていく必要がある。 ◆計画的に朝読書の時間を設けることができなかったため、次年度は1年生を対象に朝読書の期間を設け、読書習慣の形成を目指す。	B
学力向上に向けた小・中連携の充実	○中学校区四校との連携を図り、中1ギャップを解消するとともに、「学校評価」アンケートにおいて、「学校生活が楽しい」と答える生徒の割合が80%を上回る。	・学校園所連携交流会を年間3回開催し、授業参観と共に、「学習指導」「生徒指導」「道徳・人権教育」「特別支援教育」の4部会で交流する。 ・小中一貫教育の推進に向け、カリキュラム連携に取り組んでいく。 ・全国学力・学習状況調査結果について、合同分析を行う。 ・オープンスクール・入学説明会の日に、小学校6年生を対象に体験授業等を行う。	○各学期に一度、中学校区で授業参観や教員同士の交流会を開催し、各校の研究推進の取り組みを共有することで、成果や課題を明確にすることができた。 ○中学校区で学力・学習状況調査の合同分析を行い、各校の課題を明らかにすることで、小中を見通した授業改善の取り組みを検討することができた。 ◆入学説明会では、部活動の見学時間の確保を理由に、体験授業を実施することができなかったため、来年度は実施する方向で検討を進めていきたい。	A